

目次

10	母の無念	123
9	女の闘い	105
8	真っ赤なスーツ	97
7	ウソの代償	89
6	ビデオの衝撃	71
5	苦い過去	65
4	ICUにて	53
3	長引いた手術	43
2	密室での心得	31
1	病院で殺された	11
	プロローグ	6

	11	涙の法廷を終えて	135
	12	被害者は誰か	149
	13	新たな戦い	155
	14	黒づくめの男たち	171
	15	ビデオは語る	177
	16	10分の戦場	183
	17	迫る証人尋問の日	195
	18	父、裁判に出る	213
	19	外科医のプライド	223
	20	違和感の正体	239
	21	戦いは続く	247
		エピソード	257
		推薦の言葉	262
		あとがき	264

登場人物紹介

※フィクションです。

白川銀子

金さん（美山金治）

富小路雅人

御池 隆

えびす安子

五条瑞穂

- 45歳 元外科医・弁護士 医療専門の患者側弁護士 バツイチ、娘一人、シングルマザー 白川銀子法律事務所の代表
- 50歳 元総合病院の医療事務長 白川銀子法律事務所の事務局長
- 48歳 あげがた病院・消化器外科部長 消化器外科医としてキャリア二十年のベテラン、専門は「下部消化管（大腸）」既婚、娘一人
- 30歳 消化器外科医 消化器外科後期研修の三年目、独身
- 56歳 看護師長 外科病棟看護師長（医療安全課の看護師も兼任） 看護師歴三十五年のベテラン看護師
- 23歳 手術室看護師（オベ看） 看護師三年目

鳥居妙子

鴨川哲也

東山大地

東山 葵

松尾 憲

寺山美知

有馬翔子

鮫貝司朗

38歳 麻酔科医 既婚、息子二人（一歳・三歳）の子育て中のため非常勤勤務

42歳 あげがた病院の事務長 医療安全、トラブル担当

58歳 システムエンジニア 直腸がんのステージIワシと診断さ

れ、消化器外科、御池医師が入院の担当医

55歳 東山大地の妻 元看護師、娘二人（長女・京子・主

婦、次女・綾・看護師）

60歳 病院側顧問弁護士 病院側の医療事件を担当し三十年

53歳 医療過誤訴訟を専門にする患者側の弁護士

享年22歳 大学四年生。就職前に肺気胸の手術を受けるも術

中に大量出血を起こして死亡

当時50歳 あげがた病院の元外科部長 専門は呼吸器外科

有馬翔子の肺気胸手術の際の指導医

プ ロ ゴ グ

東京八重洲の小さなビルの三階に白川銀子法律事務所はある。小さな事務所の一番奥、山積みになされた医学書の間から、パソコンに向かう銀子の頭だけが見えている。事務局長の美山金治きんじ、通称「金さん」の明るい声がした。

「銀子先生、仙台地裁の書記官から電話ありました。和解、予定どおり二億で成立の見込みとのこと」

「サンキュー。万事、想定内。和解条項には医者謝罪文言も入れてもらえたし、あとの最終チェックは、金さんに任せるわ」

銀子は、パソコンの画面を睨み続けたまま、金さんに指示する。今のところ、銀子は医療訴訟で負け無しの全戦全勝の記録を更新中だ。医療訴訟の日本全国での患者勝訴率は20%弱。その中には一円で勝てたケースも勝訴にカウントされているから、ごくわずかな金額を取れたものを含めても五件に一件しか勝てない。それが医療訴訟の現実だ¹。請求金額の半分以上を獲得する「真の勝訴」は数十件に一件だろうから、銀子の勝訴率

は驚異的だ。

銀子の感触では、今日あたり仙台地裁の書記官から連絡があるだろうと思っていた。相手方代理人が折れてきて裁判所の提案した和解内容を受け入れることになっていた。訴額は二億五千万だったから、二億なら、八割が認められたことになる。上出来の勝訴的和解だ。

電話に中断されるまで、銀子は、自分の脳内にある手術イメージを文字化する作業に没頭し、銀色シルバーの短髪をかきむしっていた。昨晩からずっとこの事務所でモニターに向かっている。裁判官は人間の体の中を実際に見たことも触ったこともない。その裁判官が脳内で想像できるような言語化する作業を二十時間以上続けていた。銀子のような外科医にとっては「あたりまえ」のイメージも、裁判官にとっては非日常でしかない。リアルを見たこともない臓器の感触や位置関係を三次元で裁判官の脳内に再現する作業は、本当に骨が折れる。そもそも裁判官が銀子の書面を読んでくれる保証なんてないから、読めない医学用語にふりがなを付け、簡単な日本語に変換するところから初めなければならぬ。たとえばWBCはワールド・ベースボール・クラシックではなく、白血球(White blood cell)のことだ。

白川銀子は四十五歳のバツイチ子持ちの元外科医。今は、ほぼ弁護士。医療専門法律事務所の所長といえは聞こえはいいが、実際は八重洲にあるボロビルの十五坪が銀子の城だ。昨年までは、生活のために健康診断の医者アルバイトもしていたが、突然、院長から外来閉鎖といわれ、バイトは辞めた。医者のアルバイト生活には、何の身分保障もないことを改めて思い知ったが、まあ人生そんなモノ。外来は毎週、予約でパンパンだったが、クビになるときは突然だった。バイト先の院長は、単価の安い健診をやめて心臓カテーテル治療室を増やし、専門医の大型スカウトに金があるのでと愚痴っていた。銀子は、経営が傾き始めた中小病院の院長と一緒に沈没する気もなく、「そうですか」と弁護士の時間を増やすことに決めた。そろそろ弁護士業の方が忙しくなってきた。医学部に入れたときは、弁護士の同期達から「羨ましい転職」と言われたものだ。しかし、医者だから生活は困らないという時代もいつかは過ぎ去ってゆく。時代は常に変わり続け、ニーズが無くなれば仕事もなくなる、それだけのことだ。医師・弁護士のダブルライセンスもロースクールが出来て以降は珍しくもない。

銀子が司法試験を受けようと思った頃なんて、ひどいものだった。景気が悪くなってくると、物理学研究室の教授は、女子には結婚を、男子には大学院進学を平然と勧め

た。人のいい教授に悪意はなかったのだろうが、銀子が「司法試験を受けようと思いません」と宣言したら、研究室中に大爆笑が巻き起こった。あの教授も、あの教室も、もう時代の波に淘汰されてしまっただろう。

銀子は頭から煙を出しながら提出期限の迫る準備書面を作っている。そんなとき、事務局長の金さんは出来るだけ声をかけないようにしている。いつもは和やかな事務所の雰囲気も、大型案件の準備書面の提出前は、鬼気迫る緊迫感になる。銀子の作業に伴奏するように金さんのキーボード音も次第に速く強くなる。金さんは学生アルバイトに静かに指示しながら書面の提出準備を整えてゆく。二台のコピー機が膨大な医学文献のカラーコピーを刷り続ける音と、インクジェットの匂いが、日当たりのいい小さな事務所に広がってゆく。提出期限まであと一時間。張り詰めた空気を裂いて、電話が鳴った。

1 医療訴訟の勝訴率（原告認容率）は、令和四年の最高裁判所の統計で18・5%。一般通常訴訟は、84・3%であるから極めて低い勝訴率であることがよくわかる。

2 「準備書面」とは、裁判手続きにおいて主張を記載する書面のこと。民事裁判では訴状・答弁書・準備書面などの書面に、原、被告がそれぞれ主張を記載して提出する。

病院で殺された

1

ワンコールで受話器を取ると、金さんは低音のゆったりとした口調で、応対する。

「はい。白川銀子法律事務所でございます。当事務所は医療専門の法律事務所ですが、医療ミスのご相談でしょうか？」

優しい声が、ピリピリした事務所の空気を一変させる。電話口は物静かな中年女性だった。

「もう、事務所は終わりの時間ですよ。お話していいでしょうか。すみません……私は東山といいます。病院で、夫が殺されたので、相談したくてお電話を。一か月ぐらいで退院できるって言われてたのに、死んでしまっただけ」

金さんが話す間も、銀子はモニターから片時も目を離さず作業を続け、電話のやり取りからもれてくるキーワードを耳だけで拾ってゆく。こういうとき、研修医のところに叩き込まれた情報収集方法のありがたさが身にしみる。まず、何よりも年齢と性別。それだけで情報の半分以上を占める。金さんは、銀子のほしがる情報を電話口であえて復誦しながら、聞き取りを進めてゆく。「五十代」、「男性」となると電話口は妻か妹か。「直腸がん」、「早期」、「三日目」、「大出血」、死亡とくれば遅発性出血か。外科医が術中に何かやらかしたに違いない。外科医の普通の感覚なら、早期の直腸がんでは人は死なな

い。リンパ節郭清もしていないのに、大出血は明らかにおかしい。腹腔鏡手術か、ロボット手術か、血管のクリップが外れたか、それとも結紮けっさつが甘かったか。直腸なら仙骨静脈叢じょうみやくそうかもしれない。三日目というのも、マイナーリーク（わずかな縫合不全）や感染には早すぎて不自然だ。出血に気づくのが遅れたまま三日間というのは考えにくい。とにかく、カルテとビデオが見たい。さて、病院は責任を認めているのだろうか。

金さんは、銀子の興味が電話口に向かっていることを察知し、電話をスピーカーフォンに切り替える。電話口の声は、やや震えているが覚悟を感じさせる落ち着いた話しぶりで、銀子は医療関係者かもしれないと思った。

「何が起こったか知りたくて。とにかく病院に殺されたんだと思っています」

銀子の事務所には、毎日、東山葵のような遺族から電話やメールがくる。特に直接、電話をかけてくる依頼者は相当思い詰めている。たいてい冷静に丁寧但至少事実を聞き出してゆくと、パニック状態で興奮していた相手も、少しずつ落ち着きを取り戻してゆく。金さんは静かな声でやさしく続ける。

「病院に殺・さ・れ・た、とおっしゃるのは、どういうことでしょうか」

「直腸がんだったんです。でも、早期で。死ぬはずありません。手術前には、大丈夫、一か月もしたら仕事に復帰できる、って」

「早期、とおっしゃいましたが、直腸がんのステージというものは、ご存知ですか？」
「はい。早期のステージⅠワッといわれてました。私も看護師だったので一応、わかります。だから、あり得ないことが起こったと思っています」

銀子の事務所に連絡してくる依頼者は、医療関係者が圧倒的に多い。例えば医者夫婦が娘のことを相談してくる。看護師の息子が母のことを、理学療法士の兄が弟のことを、薬剤師の姉が妹のことを、「病院に殺された」「寝たきりにされた」といつてやってくる。

一般的に、病院やクリニックでは医療関係者の患者は、喜ばれない。医療に詳しいだけに、一歩間違えばクレームになるモンスター予備軍だから、カルテには密かに「医療関係者マーク」を付けられたりしている。銀子がかつて勤務していた中堅病院やクリニックでも、星マークや、黒シールが表紙に貼られていたり、「〇〇大学医学部教授 〇〇先生のご子息」などと赤の太字でポップアップする電子カルテもあった。医療関係者が病院でトラブルに遭うと、普通の弁護士では飽き足らず、医療専門の弁護士を探し